

絵本の読み語りから生まれる疑似体験

～「ごめんねともだち」の読み語り実践報告～

Simulated experience based on reading and talking the picture book:
Practical report of reading and talking “Gomenne Tomodachi”

吉村 真理子

上田 和美*

Mariko YOSHIMURA

Kazumi UEDA

内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のなかに「言葉による伝え合い」と「道徳性・規範意識の芽生え」を挙げている。本研究では、絵本『ごめんねともだち』の読み語りとその後の問いかけを通して、子どもたち同士の「言葉による伝え合い」を引き出し、子どもたちにけんかと友情のあり方を考えさせる疑似体験について検討する実践を試みた。

キーワード：幼児 絵本 けんか 疑似体験

1. はじめに

(1) 問題と目的

本の読み語りの後は、各自が余韻を味わうことを大切にし、子どもたちに感想を聞いたり問いかけたりすることは良くないとする考え方があつた。ただし、保育実践においては、読み語り後に保育者が子どもたちに絵本の内容について問いかけることで、子どもたち同士の言葉による伝え合いを引き出し、子どもたちの間に共感的理解が生まれ、絵本の世界により深く浸ることができる場面も見られる。内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つとして、「保育教諭等や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。」という「言葉による伝え合い」を挙げており、絵本の読み語りはまさにその力を育むために有効な場面であると言える。

幼児は、友達とのさまざまな関わりを通して多様な感情体験を味わい、それを基に他者や自分の多様な感情に気づくようになっていく。幼児が、絵本の読み語りの際に感じ取った気持ちを自分の想いに合致する言葉で皆に伝えようとし、皆に自分の気持ちをわかってもらうことができ受け止めてもらえてうれしいと感じ

る状況が、幼児同士の関わりを深めていく。日頃、子どもたちが保育者に見守られ支えられているという感覚があつてこそ、毎日の読み語り後の言葉による伝え合いも深いものになっていくと考えられる（吉村・上田、2023）。

さらに、自他の感情や欲求は異なることを理解した上で、共感や思いやりのある行動ができるようになるためには、友達との自己主張がぶつかり合う場面、すなわちけんかが重要な意味をもつ。

内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つとして、「友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことと悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる」という「道徳性・規範意識の芽生え」を挙げている。そして、5歳児後半には、ルールを守っていても負け続けることに不満を感じた子どもたちがチームのメンバー編制替えを提案し、他の子どもたちもそのような納得できない友達の思いを受け止め、遊びをより楽しく面白く続けていくために、気持ちを切り替え折り合いを付けられるようになっていくとしている。

本研究では、絵本の読み語りとその後の問いかけを

* 認定こども園 敬愛短期大学附属幼稚園

通して、子どもたち同士の言葉による伝え合いを引き出し、子どもたちにけんかと友情のあり方を考えさせる疑似体験について検討する実践を試みた。主人公の情動をその表情や動作、周囲の気配等により独特の描写を行う絵本作家である降矢なの絵本『ごめんね ともだち』を取り上げ、読み語り後の問いかけにより「共感性」(empathy)の情動的な側面である「他者と同じような情動経験をすること」に焦点を当て、主人公の気持ちに注目させた。

(2)『ごめんねともだち』の本文

「きょうのあめはひどくなりそうだな」ミミズクのじいさんは、かたをすくめました。

「また、また、かっちゃった」キツネはわらいがとまりません。もうこれで五どもかちつづけです。「まだ、まだだ。け、けんだまならぜったいまけないからな」オオカミはふきげんにゆかをふみならしました。

でも、オオカミはけんだまでもまけました。「ど、どうしたんだ。た、たまが、ゆがんでいるのか」オオカミはたまをにらみました。どこからみてもまんまるです。

とくいなトランプでも……オオカミはおおまけしました。「お、おれがこんなにまけるなんて。そうだ、おまえがズルしたからにちがいない！これはいんちきだ！」とうとうオオカミは、キツネのいすを、あしでけつとばしました。がたん！

(……い、いんちき。ほ、ほくが?)キツネは、ききまちがったのかとおもいました。いいえ、ききまちがいではありませんでした。オオカミはさらにどなりました。「いんちきは、このうちからでていけ！」

いしもながされているどしゃぶりなのに……オオカミはかさもかさずに、キツネをおいだしました。さすがのキツネもめがとがりました。もちろんいんちきなんてするわけがありません。「二どとくるもんか！こないえ。ずるいのはそっちだ。ずるっこおしっこひがみっこ！」キツネもまけずにいいかえしました。

ざんざんぶりのなかを、キツネは、どしゃばしゃどしゃばしゃあるいてかえりました。「なにがいんちきだい。とんとんちきのとんまオオカミめ！とんがらしくつてとびあがれ！」あめなんかへっちゃらです。

ところがオオカミのほうは……すぐにしょげこんでいました。「お、おれのいいすぎだった。あいつは、いんちきなんかぜったいしていない」それはオオカミが、だれよりもよくしっていました。でも、まけて、まけてくやしくて……、きがついたらさけんでいたのです。「いんちきだ！」と。

つぎのひ。オオカミはいつものさんぽみちにでかけました。もしもキツネにあえたら「ごめんな」ってちゃんとあやまるつもりで。

キツネはやってきていました。ところがいざとなると—オオカミは「ごめんな、キツネ」といえませんでした。キツネだって「オオカミさん」と、こえをかけたのに、かおがぷいっとそっぽをむいてしまいました。

つぎのひ。キツネははらっぱにでかけました。きのうのことがきになって。オオカミもきていました。でも、キツネをみても、オオカミはこえをかけてはくれません。キツネは、なんだかきゅうにさびしくなってきました。(きのうぼくがそっぽをむいたりしなければ……。いまごろふたりはなかなかおりして……。ごめんね、オオカミさん)

三つかめ。ふたりは、いつもあそんでいたおおきなきをせにうつむいていました。(また、あそびたいよ。……オオカミさん)(また、あそびたいなあ。……キツネと)ブランコが、ふたりをさそうようにゆれました。

オオカミはもうさびしくてさびしくてつめをかんでいました。(「ごめん」もいえないなんて。わるいのはおれなのに)キツネはとうとうこらえきれなくなり、なみだをこぼしました。(いやだよ、いやだよ。オオカミさんとこれっきりになるなんて……)

ぼとり、なみだが、アリのうえにおちました。ちいさなアリはずぶぬれです。キツネはあわててアリにあやまりました。「ごめんなさい」

ごめんなさい—オオカミはきのむこうからとびだしました。「ごめんなさいだって！ごめんはこっちだ。おまえはちっともちっともわるくないぞ！」オオカミは、キツネをぎゅっとだきしめました。だきしめて、なんどもなんども、ほおずりました。

ふたりはうたいだしました。なかなかおりしたのが、うれしくってうれしくって。ごめんなごめん じめんはろめん ろめんでんしゃはそらにはのぼれん れんがのいえはうみにはうかべん べんとうのおかずはアリにはやれん ありアリありがとう へんなうたです。

「あめのちはれだね」ミミズクのじいさんは、だれかさんにつぶやきました。

(3) 絵本『ごめんね ともだち』について

生田(2018)は、「内田のテキストは、オオカミとキツネの行動のみを書く、素っ気ないほど簡潔な文体である。そのことが、降矢の絵の表現が存分に発揮することにつながっている。この絵本の表現の特徴は、

(1) オオカミとキツネの大胆なコントラストとデフォルメの構図、クローズアップと裁ち切り、異時同図、絵本モンタージュなどの技法により、迫力のある、ダイナミックな画面。(中略)(3) 主人公の二人の心の内面を、表情や動作に加えて二人を包む周囲の空気・気配の独特の描写。(4) 絵本の中の絵の遊びやサブストーリーによって、絵の細部をじっくり見る子ども読者の興味をかき立てた、などの点を指摘することができる。内田の『絵がなければ立つことのできない文』と、降矢の『文がなければ立つことのできない絵』の共同作業によって、深刻になりがちな主題を笑いに包み、絵本を通して子どもたちが『友情』について考えるよう工夫されている。」としている。さらに、「絵本モンタージュ」について、「1枚の絵だけでは得られないイメージや心理的効果を、複数の絵を組み合わせ、めくりの残像効果によって読者に与える効果をいう」としており、本作品では「第1見開きから第5見開きまでの絵により、オオカミが負けて悔しい心情を、第7見開きから第10見開きまでの絵により、『ごめん』と言いたいのと言えない心情を、第10見開きから第15見開きまでの絵により、あるきっかけで『ごめん』と言い、仲直りするまでの心情を表現している」としている。

2. 『ごめんね ともだち』読み語り実践報告

(1) 日時

20XX年10月XX日(木) 13:00～13:30 晴れ

(2) 場所

保育室

(3) 対象クラス(5歳児)の状況

A認定こども園の5歳児クラスB組の園児は、男児13名、女児9名の計22名である。

進級当初、絵本を楽しんで見る子どもが大多数であったが、絵本を見ていられない子どもたち4、5名がふざけたり、周りの子にちょっかいを出したり、寝転がったりする様子が見られた。絵本を見る「楽しさ」の経験不足が推測され、読み語りの時間は楽しめないから嫌だと感じているようであった。また、外国籍の子どもは、日本語を十分理解できないために長編の絵本は飽きてしまうなどの要因も考えられた。そこで、選書方法を検討し、5歳児クラスでも3歳児向けの絵本も取り入れ、保育者とともにみんなで絵本を楽しむ経験を重ねていった。虫探しや泥んこ遊びを好む子ど

もたちも多かったため、『かがくのとも』(福音館書店)も多く取り入れた。すると、次第に絵本の世界に自然と入り込めるようになり、5月中旬にはみんなで心地よい読み語りの時間を共有して過ごせるようになってきた。さらに、10月には幼年童話『エルマーのぼうけん』のシリーズの読み語りを楽しめるまでになっている。

(4) 読み語り後の子どもたちの反応

絵本を読む前に、担任が、絵本の読み語り後にみんなに聞きたいことがあることを伝えてから読み始めた。

○担任「オオカミの気持ちを聞いてもいい？」

A男「いんちきって言っちゃった」

B男「もう家に来るなって思ってたと思うよ」

(個々に子どもたち同士で意見を言い合うが、聞き取れない)

○担任「なんでオオカミくんはこんな風になってしまったんだろう」

A男「何度も負けたから」

C子「何度も負けて悔しかったから」

B男「悔しかったから」

C子「悲しいよね」

D男「めっちゃ悔しくて悲しくて」

E子「キツネに意地悪を言っちゃったんだよ」

A男「悔しくて怒ってばあーっと追い出しちゃった」

D男「オオカミが見ていない間にずるっこしたと思っちゃったんだと思う」

○担任「みんなはそういう気持ちになったことはある？」

ほぼ全員「ない」

○担任「えっ？お姉ちゃんやお兄ちゃん、お父さんやお母さんとゲームをしていて…」

「あ〜〜」(多くの子がうなずく)

○担任「もう、一生懸命にやっているのに全然勝てないときは？」

D男「Dちゃんはずっと勝ってる…」

F子「ぼくは…」(多分姉に負けて嫌な気持ちになると言いたかったか?)

G男「ぼくはお姉ちゃんとゲームはしないもん」

(L男、首を傾げる)

○担任「じゃあオオカミくんの気持ちはわかる？」

H男「オオカミくんの気持ちはわからないよ」

(L男、首を傾げる)

A男「キツネの方がわかるよ、悔しくて…」

○担任「わかった、ではキツネの気持ちは？」

G男「悔しい気持ち」

D男「寂しい気持ち」
 C子「悲しい気持ち」
 E子「勝った時はせっかく気持ちよかったのに」
 H男「オオカミさんが怒った時は、キツネさんは悲しい気持ち」
 B男「蹴り飛ばした時の方が悲しいよね」
 H男「家を追い出された時も同じ気持ちだよ」
 D子「キツネが怒るのは当たり前だよ」
 I子「オオカミがインチキだと叫んだ時、ぼくはインチキじゃないと伝えただけでわかってもらえず、怖い友達になってしまったと感じた」
 G男「へえ～、そんな考え方があるんだね」
 D子「怖い友達になって、ちょっとびっくりしちゃったという感じ」
 (J男が真剣に話を聞いていたので、担任がJ男に振ってみたがすぐには答えず、ぼそっと)
 J男「オオカミの気持ちの方がわかる」
 ○担任「じゃあオオカミの気持ちの方が分かる人？」
 (5、6人が手を上げる)
 「キツネの気持ちの方がわかる人？」
 (10人以上が手を上げる)
 B男・D男「どっちもわかる」
 G男「勝った時はうれしいけど、インチキと言われた時は悲しい」
 ○担任「結局、許してあげれば一緒に遊べたのに…キツネが言っているよね」
 E子「オオカミが勇気を出して謝ろうとしたけれどできなかった」
 C子「ごめんねって言えなかったから」
 H男「オオカミが勇気を出して謝れば良かったんだよ」
 ○担任「ごめんねって大事？」
 全員「大事！」
 H男「一番大事な言葉」
 D子「あたりまえでしょう、そうだよ」
 (周りはうなずく)
 ○担任「アリは…」
 D子「なんでアリ？はあ～？」
 G男「アリは別に悪くない」
 B男「アリが一番かわいそうでしょう」
 C子「だってびっしょびっしょになっているんだよ、涙で」
 A男「アリの方がかわいそうだよ」
 ○担任「アリがいてよかったね」
 D子「どうして？」

○担任「アリがいなかったらごめんねが言えなかったでしょう？」
 D子「そうかな？謝るタイミングがあれば」
 I子「一番後ろのページにアリさんへと、アリは言葉が伝えられないから手紙を書いたんだよ」
 C子「涙で濡らしたからね、ごめんねじゃなくてありがとうなんだね」

(5) 考察

〈読み語り実践者：上田〉

子どもたちのやりとりを逐語に起こしていく過程で気づいた点が多々あった。まず、普段あまり発言せず、自分の考えを主張しないA男が、自分の考えをよく伝えられていて驚いた。絵本の内容がわかりやすかったからなのか？好きな絵本なのか？当日の午後、本人に聞いてみたところ、「だってわかったから」と答えていた。

B男の考え方に共感できたからなのか、仲良しのK男はほぼ発言せず「B男と同じ（考え）」というようにうなずいており、互いに手の届く位置に座っていた。B男とK男はいつも以上にじゃれあっており、まるで自分たちはオオカミとキツネとは違うんだとでもいうように、仲良しであることをアピールしているようであった。

L男は発言しなかったが、友達の話に耳を傾け、ときどき首をかしげるなどの仕草があった。特に「オオカミの気持ちがわからない」の件では、首をかしげ納得がいかないような表情をしていた。きっと考えがあったことだろう。その場でL男に発言を促せばよかった。読み語り後に園庭で遊んでいるL男に尋ねてみたところ、「みんな、オオカミの気持ちはわかるよ」と話し始めた。「だってオオカミと同じことをしている子が多い。みんな勝手なことをしているよ」「この間、B男はK男に意地悪したでしょ？D子もM子のこと仲間に入れてあげなかったよ。C子も！」などと、読み語り後に発言していた子どもたちのいけない行動を指摘し始めた。他の子どもたちの様子をよく見ているし、記憶もはっきりしていて驚いた。L男はひとしきり話すとすがすがしい表情になった。

オオカミとキツネのやりとりから学ぶことは多い。発言しなかった子どもも友達の考えに耳を傾け、うなずいたり疑問に思ったりしている様子がうかがえた。

絵の表現からオオカミやキツネの心情がわかりやすいため、子どもたちは自分にもあり得ることとして、オオカミとキツネの双方の立場に自分を置いて考えているようであった。子どもたちは本作品の読み語りを

体験することで、友達とのけんかを疑似体験し、オオカミとキツネのそれぞれの立場に身を置きながら、「自分だったらどうする？」かを自らに問い続けていた。オオカミの「キツネの椅子をけっとばす」という行動についても、いけないことだが気持ちに余裕がないとついついしてしまうということも、子どもたちはわかっていた。

しかし、「オオカミの気持ちがわかる」と発言すると「自分もオオカミと同じような悪いことをしている」と思われるのではないかという危惧からなのか、「オオカミの気持ちはわからないがキツネの気持ちはわかる」と発言した子どもが多かった。日常生活において、子どもたちがオオカミのように自分の感情をそのまま相手にぶつけてしまうことはしばしばある。描かれたオオカミの激しい表情から、仲良しのキツネであればその悔しさに気づけそうなものではある。しかし、有頂天になっているキツネは気づけなかった。幼児はまだ自己中心的であるが、5歳児ともなると、一緒に遊んで楽しいと感じる気の合う友達ができ、その友達は、自分の気持ちを受け止めてくれ弱い自分も出せる対象となる。友達とのけんかを体験するなかで、友達の表情等から友達の気持ちの変化に気づき、自分の気持ちを調整し、友達に心遣いをしようとする気持ちが芽生えるようになってほしいと思っている。

〈共同実践者：吉村〉

子どもたちは、絵本『ごめんね ともだち』の読み語りを体験し、さらに上田の問いかけを受けて互いの思いを伝え合い共に考えることで、オオカミとキツネのそれぞれの情動を疑似体験している。生田（2018）の指摘の通り、本作品が、主人公二人の表情や動作に加え、二人を包む周囲の空気・気配の独特の描写により、二人の心の内面をわかりやすく描き出していることが効果的となっている。

上田は、読み語り後にまず「オオカミの気持ちを聞いてもいい？」「なんでオオカミくんはこんな風になってしまったんだろう」「みんなはそういう気持ちになったことはある？」というような問いかけによって、子どもたちに主人公の内面について丁寧に問いかけている。さらに、「オオカミの気持ちはわからないがキツネの気持ちはわかる」と発言する子どもたちの心の裏側を感じ取った上田は、「えっ？お姉ちゃんやお兄ちゃん、お父さんやお母さんとゲームをしていて…」「もう、一生懸命にやっているのに全然勝てない時は？」「じゃあオオカミくんの気持ちはわかる？」というよう

に、日常生活における自分の行動をイメージしやすいような言葉かけにより、子どもたちが真の自分の情動に向き合えるようにしている。

次に、「結局、許してあげれば一緒に遊べたのに…キツネが言っているよね」という言葉かけにより、互いに意地を張って関係修復が困難になってしまっているオオカミとキツネの状況を明確にし、子どもたちから「オオカミは勇気を出して謝ろうとしたけれどできなかった」という発言を引き出している。

さらに、「ごめんねって大事？」とあえて子どもたちに問いかけることで、絵本のタイトルにもなっている「ごめんね」と謝るという行動に注目させ、子どもたち全員から「大事！」という発言や反応をも引き出している。子どもが「一番大事な言葉」と発言したり、「あたりまえでしょう、そうだよな？」と周囲に同意を求めたり周囲がうなずいたりする様子は、まさに園での読み語りという集団体験の醍醐味と言えるであろう。

また、上田はここで「ア리가いてよかったね・・・」「ア리가いなかったらごめんねが言えなかったでしょう？」という言葉かけにより、オオカミとキツネは偶然のきっかけや勘違いにより仲直りができたという事実注目させようとしている。ここで、「そうかな？謝るタイミングがあれば」というD子の発言を取り上げ、ア리가なくてもオオカミとキツネは仲直りができたのだろうか？子どもたちがけんか後の「謝るタイミング」というものをどのように考えているのか等について深めてもよかったのではないかな。同様に、C子の「涙で濡らしたからね、ごめんねじゃなくてありがとうなんだね」という発言を取り上げ、裏表紙にあるキツネからアリへのケーキのプレゼントの意味について、今一度子どもたちに問いかけ、オオカミとキツネの仲直りができた喜びの大きさについても皆で味わえるとよかったかもしれない。

今後も、読み語りにおけるさまざまな保育者の語りかけの手法について詳細に検討していきたい。

参考文献

- ・内田麟太郎・降矢なな 『ごめんね ともだち』 偕成社 2001
- ・内閣府・文部科学省・厚生労働省 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」 フレーベル館 2018 pp.55-57、64-65
- ・藤本朝巳・生田美秋編著 『絵を読み解く絵本入門』 ミネルヴァ書房 2018 pp.254-259

- ・吉村真理子・上田和美 「絵本を活用した心のケア
～『ずーっと ずっと だいすきだよ』『きつねのお
きゃくさま』～」 千葉敬愛短期大学総合子ども学研
究所 年報 2022（令和元）年度 2023 pp.53-58